

15頁 第一部 序論的行程[ANLÄUFE 助走]

17頁

5 1行目

今日の講壇に支配的な倦怠の事実直面しつつ、著者は、情熱をこめて、説教するということのために弁論する。説教の言葉——神の言葉、人間の言葉、そして人間のための言葉がひとつになっているもの——は、何よりもまず第一に、ある特定の人間の語る言葉として聞かれる。説教の教師そのものが、自分は情熱的な説教者であると考えているということから、この説教論は始まるからからである。

10

今日は三歩進んで二歩下がって、前回最後の、郷家先生が感想を述べ、祈られた後の加藤先生の問いかけからはじめます。

15

(感想と祈り 郷家先生) 説教に対する情熱ってことを語られて、すごく、自分はどうかなってふうに改めて思われました。

(加藤先生) **ひとつだけ質問。郷家さん情熱があるでしょ、説教に。情熱ない？**

(答 郷家先生) 情熱はありますけども。このいわゆる限界点を目指して行くという思いにおいて、ほんとうにこういう学びによって助けられてるっていう形でして。そういうものですね。あるかって言われて、あるって答えるのもちょっと……

20

この加藤先生の問いかけはそのままになりました。ここについて、もう少しみなさんと対話できればと思いました。また加藤先生はどうしてそう問われたのか？本論を読みなさいと言われるだけかもしれませんが……

25

そうしてもうひとつ！東神大学生説教塾読書会ではこの部分「自分は情熱的な説教者である」と、「考えている vorstellen」の訳を、今だったら別の言葉にするかもしれないとおっしゃって、そのままになっていました。今なら、先生はどう訳されますか？

30

Diese Predigtlehre beginnt damit, dass der Predigtlehrer **sich** selbst **vorstellt** als leidenschaftlicher Prediger.

「説教の教師そのものが、自分は情熱的な説教者であると考えているということから、この説教論は始まるからからである。」

*****東神大学生説教塾録音 No.2 18分～

- 35 これが非常にユニークな問題提起になっている言葉です。内容的なことは第1章の文章、本論から説明をして行った方が良いでしょうと思いますけれども。
- まずここで説明をしなければならないことは、3行目の「説教の教師そのもの」ってのはボーレンさんその人ですね。そのボーレンさんその人が説教学の本を書き始める時に、自分は、つまりボーレンさん自身のことを「情熱的な説教者
- 40 であると考えている」。この「考えている」という言葉で、まだわたしは不満があるので、今だったらもうちょっと別の訳をしたかもしれませんけれども。そうかここ黒板がないから。頭で思い浮かべてくださると良いと思うんですけども。この「考える」と訳している言葉は、そこで用いられている動詞は、
- 45 フォアシュテレン/vorstellen フォアっていうのは英語風につづると vor ですね。ドイツ語でフォア、シュテレンてのは stellen ですね。stellen っていうのは「置く」ということです。たとえば、この本をここに置くっていう時に Ich stelle. っていうんですね。それにたとえば Ich stelle mir……っていうと「私に」、再帰動詞でもあるわけで、自分に動作が戻って来る。Ich stelle mir vor っていう分離動詞ですから……この本をって言った時に、Ich stelle mir
- 50 vor っていうたら、「これを私の前に置く」と言いますけども。もうひとつその「私の前に置く」と訳される言葉は……具体的なものを置かなくても良いんです。想像で置くんです。でこの再帰動詞 sich vorstellen というのを、かつてドイツから哲学が入って来て、日本語の翻訳が出始めた時に、このドイツ語はこのように日本語に訳せっていう約束事が出来たわけです。みなさんは気付
- 55 かないかもしれませんが、「概念」っていう言葉がありますね。「概念」っていう言葉もこれは昔の日本語にはなかった言葉です。明治時代に生まれた言葉です。今、「概念」っていうとある程度の意味は通ずると思いますけれども。ドイツ語では begreifen っていう、ものをこうつかむ、で、つかんだ時に、この、つかんでこれ何であるかってこと分かった時に生まれたものが Begriff っていうの
- 60 ね。つかんだものが何であるか。概念っていうのは、あるものの中身も何も良く分

かってる時に概念で言わなければいけない。説教者の概念って言った時に何も分からないで説教者の概念で言えない。説教者の概念って言った時にすぐに続いて出て来る日本語は、概念を持つって言い方ですね。それは言い換えるとわたしは説教者っていうのは何であるかが分かってるって。

65 だから説教者の概念とか理念とか観念とか、全部これはドイツ語の翻訳として日本語が全部意味を変えてったわけで、その中でこの vorstellen っていうドイツ語は何て訳したかっていうと、今、みなさんは使わないと思います、**表象**
するって訳すんです。ひょうしょうするっていうとなんか表彰状なんていうのを思い出しちゃいますけど、そうじゃなくて、表はおもてでいいんですけど、
70 しょうは象という字ですね。象徴の象、かたちって。で、表象っていうのは、「かたちをおもてに出す」。自分の前に出す。そういうふうに言うと表象するなんていうとひどく難しくなっちゃいますけれども、たとえば誰かから手紙が来ます。そしてこの私の友人が手紙を寄越して、僕の娘も18になりました、と。とってもかわいらしい娘になったと。娘の姿を思い浮かべてみてください
75 って言う時に、Bitte stellen Sie sich vor, wie schön bei mir sie ist. っていうふうに言うような時には、「私の娘の姿をあなたの前に置いてみてください」。「思い浮かべる」。ね。

で、長い話をしましたけれども、ここで「考える」ってのは、そういう意味の言葉なんです。 **非常に具体的に、説教者として自分の姿、あるいは、具体的に自分の説教を思い浮かべるということです。ここでは自分がどんな説教者であるかって言うことを思い描く、もっと別な言葉で言うとイメージです。これとっても大事です。どんな説教者イメージを持ってるか。(②24分)**

これしかし、普通、説教学でこんなはじめ方しないんですよ。だいたい説教
85 学始める時には、説教とは何かって。あるいは説教学の方法とは何かっていう、まさに概念的なことを概念として明確にすることから始める。そうでないと学問が先に厳密に進まないから。だから学問ってのは絶えず概念を提示してはそれを明らかにしていくってようなやり方をしていく。説教学の概念。説教学の方法の概念。 **ボーレンさんはいきなり自分が抱く、自分のイメージですよ。自分の説教者としてのイメージは、わたしは情熱的な説教者だということから始めるって言う**
90

んです。その説教論から始める。非常にユニークですね。(②25分)

2月1日にボーレン教授が亡くなりまして、2月10日にハイデルベルクの郊外のボーレンさんが住んでいた村で葬式がありました。そこでした弔辞のたぐい、あのメラー教授が説教やって、何人かの人が一種の弔辞、記念の言葉を語ったんで、これは説教塾のホームページに出て来る、紹介されていますから、読んでみると良いと思います。で、その人たちが、絶えず、何度も取り上げてるのは、この情熱としての説教、説教に対する情熱、説教に対する情熱家としてのボーレン。

で、なぜそんなことを言うかって言うと、「今日の講壇に支配的な倦怠の事実」。飽き飽きしてんですよ。あの、今でもドイツに行って帰って来た人が報告すると、どこの教会の礼拝に行っても、空っぽですっていうのね。私はドイツのプロテスタント教会って教会堂が満たされた時代ってそんなにないよと。空っぽだからってびくともしてないってところもありますよって言うんですけども。空っぽは空っぽ。残念ですね。なぜ空っぽかって言うと、礼拝ぐらい飽き飽きするものはないからですね。つまないんですよ。なぜつまらないかっていうと説教がつまらないからです。カトリックは多いんですよ。あのドイツの町で面白いのは広場がある。その広場に良く、カトリック教会とプロテスタント教会が同じ広場に向かってこう、あの出入り口を向けてることがあります。で、日曜日の朝、見てますと、こっちでミサが終わって、どっと出て来ますよ。プロテスタントの礼拝が終わったらちよろちよろ。このちよろちよろとどっとするのは非常に差があります。(27分)

ハイデルベルクにもイエズス会礼拝堂がありますけども、メラー教授と日曜日の朝、写真撮りに行ったんですけど、末席までいっぱいびっくりしましたね。そういうことがあるんですけども。説教が飽き飽きしてんですよ。で、**非常に重要なのは、ボーレンさんここで言ってるのは、聴き手が飽き飽きするのはなぜかっていうと、説教者が飽きてるからです。**これはなんともいえないことですがけれども、説教者が飽き飽きとした気分でやってる。で、ある時、ボーレンさんと二人で住んでた家の近くの礼拝堂の礼拝に、たまたま行かざるを得ない事情があ

って行ったんですね。で、出て来てボーレンさんがどうだったって言ったら、まあ、おつとめでしたね【ドイツ語:dienstlich?amtlich?】、説教しないと牧師は食ってけないってな感じで、坊さんが飽き飽きとお経を読むのと同じように説教してる。**この飽き飽きとしてるという説教者の状況にぶつかって、説教とは情熱を込めるもんだと、これがまず根本的に大事ですね。**だから日本に來られたボーレンさん、メラー教授もそうでしたけど、まず聴き手に感銘を与えたのはその情熱ですね。ほんとうにうれしそうに、もう全存在がそこでこう燃え上がるような説教をしますね。で、こういうこの情熱、を込めて説教する。説教の情熱ってことから語り始める。

で、この時に、説教の言葉について二行目でていねいに言ってる。「説教の言葉」ってのは「神の言葉、人間の言葉」、その二つ。これは良く言うことですね。説教というのは神の言葉と人間の言葉と言いますけども。これにボーレンさんの特色として加わってるのは、「人間のための言葉」。神と人間が語る言葉が説教をつくってるんだけど、それは人間のためになる、人間に向かって語ってる言葉である。しかもそれがばらばらじゃない一つだと。こっから神の言葉ってんじゃない。神の言葉と人の言葉が一つになってるっていうふうに言うんです。(②29分40秒)

5行目 第一章 情熱[Leidenschaft 激情、熱狂の意味さえあり]としての説教

わたしが情熱をこめて、好んですることが四つある。絵[水彩画]をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である。(4) **情熱というものは、すばらしいもの、しあわせを与えるものだ**とわれわれは感じとる。**情熱は祝福を開示する**[Vier Dinge tue ich leidenschaftlich gern: das Aquarellmalen, das Bäumefällen und das Predigen. Eine Leidenschaft empfindet man als schön, beglückend, sie eröffnet Seligkeit]。白い画布、絵筆と絵具、何よりもさまざまな色彩、そこにひとつの新しい世界が生じる。そしてわれわれは夢中になるのである。——けわしい壁、粉雪が舞う。スキーに支えられ、重力を失ったかのように、空間と時間の支配者となって、走りに走る。地上から全く自由になりつつ、しかも地上に

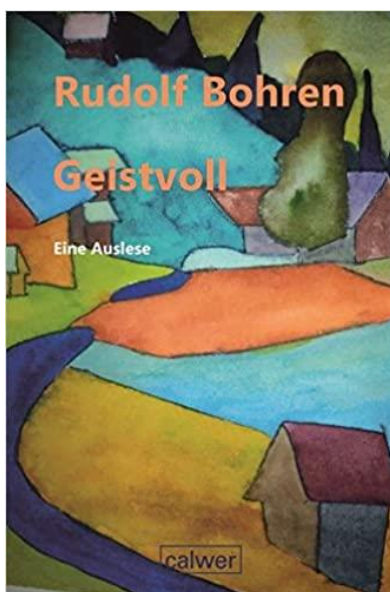
あり、雪の中に飛び込んでいく。——傲然と立つ木、さからいつつ立つ木、これに攻撃を加えるには戦法を練らなければならない。知略も必要であるが、何よりもねばり強さがなくてはならない。こいつはむかってくるからである。その傲慢がみじんに碎かれるまでは、自分はこの木に勝てないのではないかと思う瞬間もあるのである。——絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、それはわたしの心を燃やす——そして説教するということもそうなのである。説教することが開示する祝福をわたしは描き尽くすことができない。

*****東神大学生説教塾

「わたしが情熱をこめて、好んですることが四つある。絵〔水彩画〕をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である。」

ここが最初は三つだったと加藤先生はおっしゃってましたが、それが何だったかは結論がでませんでした。今ならどうでしょうか？

○加藤先生宅の見たかったボーレン先生の絵の写真を中井先生が送ってくださいました。気になってるのはボーレン先生の著書の表紙はボーレン先生の絵ではないですよね？似てますが？



18頁 | 行目以下

今述べた三つの働きはすべて、説教することのたとえとして通用する。特別な方法で描くこと、走ること——新約聖書はひとつの「道」について語る——樹木ではないが、神の認識にさからうあらゆる建築物を破壊すること、そこではいずれにせよ、新しい世界が、自由が、戦いと勝利が大切なのである。それゆえに、説教することはすばらしいのである。もとより説教は水彩画と同じく失敗することもあるし、スキーをしている時と同じように倒れることもあるし、都会育ちの男が木を切る時のように疲れ果てて、絶望的になることもある。だがしかし、説教することはすばらしい。それは喜び〔イタリック〕をつくる。これが説教において学ぶべき第一のことである。第一章における第一のことはこうである。説教とは、喜びをめざす教えである。

[Predigen ist schön, es macht Freude. Das ist das erste, was in einer Predigtlehre zu lehren ist. Punkt eins im Paragraph eins lautet: Predigtlehre ist Lehre zur Freude;] 説教への手びきは、喜びへの手びきである。説教するということは、喜びへと至るべきなのである！ この喜びの中で、神についての言葉は、その目標に達する。喜びは、神についての、あの最も優しい証明を作りあげる。この証明は、諸思想を力づくで倒さず、むしろ救いあげてしまうので、神学者たちには不愛想に軽蔑されてしまうものである。[In der Freude kommt die Rede von Gott zu ihrem Ziel. Freude bildet jenen zartesten Beweis Gottes, den Theologen oft deshalb grämlich verachten, weil er die Gedanken nicht vergewaltigt, sondern mitnimmt.] (他の箇所、特に第二章第Ⅱ節第一項を参照のこと)。

「説教とは、喜びをめざす教えである。説教への手びきは、喜びへの手びきである。説教するということは、喜びへと至るべきなのである！ この喜びの中で、神についての言葉は、その目標に達する。」

ここはアーメンと口にしたいほど良くわかったのです。

でもその次が良くわかりませんでした。

「喜びは、神についての、あの最も優しい証明を作りあげる。この証明は、諸思想を力づくで倒さず、むしろ救いあげてしまうので、神学者たちには不愛想に軽蔑されて

しまうものである。」

まず「あの最も優しい証明」です。「あの」とは何か？

210 最も優しい証明 zartesten Beweis
zart とは私の感覚では、「繊細な」です。

「諸思想を力づくで倒さす、むしろ救いあげてしまう」もわかるような気がします。

215 ただ、ここは原文では、[weil er die Gedanken...mitnimmt [mitnehmen]
mitnehmen の加藤先生の訳は加藤先生の意識でしょうか？
mitnehmen 持って行く ？(すかさず) 利用する ？(口語) (機会などを) とらえる

220 後ろから 8 行目

わたしの趣味とするところを……説教することと同列にすることをしたのは、思慮あ
ってのことである。結局は、説教は、木を切ることとは違って、休みの日の仕事
[Freizeitbeschäftigung]、日曜日の仕事 [Sonntagsarbeit] なのである。そ
れは喜びを作るべきなのである！

225 *****

趣味と説教とを同列にしたのは、思慮あってのことである。

ここはこの後出て来るところでしょうか。

訳語ですが、主の日、日曜日の仕事はわかりませんが、休みの日の仕事というのが引
っ掛かります。

230 Freizeitbeschäftigung 余暇利用の [趣味的な、レジャー] 活動。趣味の活動 ←
→ しばしば話題になる Dienst おつとめの反対の意味で用いられるのでしょうか？

後ろから 6 行目

235 使徒パウロは福音の伝道者を「喜びのために共に働いている者」[第二コリント一・
二四]と呼んでいる。説教を準備するとは、喜びの備えをすることであり、そこでは気
むずかしかったり、中途半端であったりすることはあり得ず、ただ全く喜んで、つまり

情熱的に事にいそしむのである。そしてそのことによって、すでにわれわれ自身が、来りつつある喜びの中に引きこまれてしまうのである。

240 われわれのさまざまな労働が疎外のもとにあるのではなく、アダムの呪いのもと
になかった〔以降、オレンジ色は、心惹かれる表現につけます!〕としたら、おそらく
いっさいの労働が休みの日の仕事となり、喜びの地平の中に置かれることになる。う。
喜びに仕えるものであるはずなのである。そうとすれば、説教の作業は、いっさいの
人間の労働の具体的典型であるともいえよう。説教作業の中にひそんでいる可能性
245 は、その本質を明らかにする。説教をめぐる努力する者は、労働の前衛（アヴァンギ
ヤルド〔1. 先駆者、開拓者；（芸術運動などの）前衛派の人。2. 前衛〔部隊〕〕）に属
する。説教者というのは、原則的に言って、先立って働く者 Vor-Arbeiter なのであ
る。

250 ボーレン先生の造語、言葉の二重の意味（Wortspiel）でしょうか？いつもの！
Vorarbeiter〔独和大辞典〕（職工の）監督、（工場の）組長、職（工）長、工夫長、
職工頭、人夫頭。
Vorarbeiten 1. （仕事の）下準備〈下ごしらえ〉をする、準備作業をする；予備工
作〈根まわし〉をする。2. あらかじめ〈前もって〉仕事をしておく 3. （…に）仕事の
255 手本を示す。
Vorarbeit （仕事の）下準備、下ごしらえ、準備作業；予備工作、根まわし。

3行目

260 説教者がなすべきことというのは、いっさいの作業が、意味深い、固有の仕方で、そ
れに向かうべく定められているようなこと、つまり、喜びをこの地上にもたらすための
助けとなるということである。このような観点においては、説教することは、遊びの性
格を持っている。このことによって、すべての説教に共通の唯一の基本的性格を語る
わけではないが、この特質を無視することはできないのである。何よりも神の言葉を
265 賛美し、歌いあげている詩篇第一一九篇〔アルファベットによる詩。訳注から「一種
のいろは歌」〕が、その原文においては文字による遊びを表しているということは、ほ

とんだ偶然とは言えないのである。(5) 詩篇作者にとっては、この遊びの形をとることが、神の言葉について語る正しい方法であったことは明らかである(ここでは遊びたわむれる〔Spielerische〕なのであって、賭けて遊んだ〔Verspielte〕わけではない!)。

spielerisch 1. 遊びの, 遊び半分の 3. 不まじめな, おざなりの.

verspielen 1. 賭事で失う, 賭博〈ばくち〉でする; 2. 賭ける 3. (時を) 遊んで過ごす

後ろから 8 行目

各福音書における最も特徴のある語り口が、やはり遊びの形態のものであるということも偶然ではないし、われわれの説教にとって無意味ではないであろう。即ち「遊びとしてのたとえ (Das Gleichnis als Spiel)」(ゲオルク・アイヒホルツ) である。そうなると、説教するということは、言葉による聖なる遊戯である。宗教劇〔Sakralspiel〕というのではない。むしろ子供の遊び〔Kinderspiel〕である。話すことを学ぶ「幼な子」〔Kindlein〕の遊びである! わたしが思うに、多くの説教者がこの事情を忘れ、そのために自分のやっていることを喜ぶことができなくなっているのである。自分がホモ・ルーデンス(遊びの人)(6)であることを説教者が忘れてしまうと、容易に、預言者の衣で着飾った、講壇上の悲劇役者になるか、あるいは、もっと悪いことに、しかも残念ながらこちらの方が広く見られる現象であるが、退屈な人間になってしまうのである。

遊びの概念については次のものを参照していただきたい。〔以下参考文献あり〕

614頁訳注(6)注の必要もないと思われるが、オランダの文化史家ホイジンガ(一八七二—一九四五年)の有名な著作『ホモ・ルーデンス』の題名から、知られるようになった概念。ついでに言えば、ボーレン自身が、あとがきで挙げる文献の示すように、この問題について一書を著している。一般的に言っても遊び、遊戯を積極的に評価しようという傾向は、かなり見られるようになり、一種の流行とさえも言いうる。神

学の世界でも、そうなのである。

300 20頁後ろから11行目

わたしの言うことを誤解しないでいただきたい。遊び〔Spiel〕というのはふまじめなこと〔Unernst〕、だらしのないこと〔Schuldlosigkeit〕を意味するものではない。そのような人間は、遊んだとしても、説教を悪くもてあそんでしまったのである。そういう人は、偽りの遊びをしていることになる。遊びとは、ここでは、中途半端ではなくて、
305 情熱的な喜びをもって、それに参与しているということであって、事柄の真剣さを疑うことではない。ただ、われわれが人間であって、神ではないことを承知しているのである。説教者がホモ・ルーデンスであるということの意味は、おそらくこういうことになる。説教者は、説教がなすべきことを自分で「作り出す」ことはできない。理性の啓蒙を知り、自己の成熟を常に賞賛し続けているようなこの時代にあって、全くの
310 最初から、ほかならぬこの特質をこそ強調することは必要である。それは幼な子のごとき語り方をするように励ますためではない。逆である。聖なる遊戯としての説教は、知恵をもって説教することとも言えよう。この知恵は——箴言第八章三〇節によれば日々に恍惚たる喜びであり、神の前に常に遊び楽しんだのである。もとより、この知恵のたわむれが、この世の賢者たちには不可解なままであることもありうるでは
315 ありう。

楠原の私的宿題（説教シンポジウムから）

2011年4月2日付けでいただいた加藤先生からのメールに次のようにありました。
「私が説教者として関心があるのは、知恵文学です。知恵文学と言っても範囲は広いでしょうが、知恵文学と呼ばれるものの誕生と、それが意図したものは説教者の関心と深く関わっていると思っています。つまり説教のパースペクティブと知恵文学のパースペクティブとは関わりがあると思っているのですが。」これが……ひとつの宿題となりました。そして「聖書が説教をどのように理解しているか」あるいは「あるべき説教の言葉」をたどるため、旧約聖書の知恵文学と説教との接点について言及する言葉を探すことをします。
325

G・キッテル編の新約聖書神学辞典の「知恵（すなわちソフィア）」

G・フォーラーの次のような言葉がありました。

330 「人格化された箴言1-9章のホクマー〔ヘブライ語 知恵〕はその宣言において、預言者のように、高貴な権威を主張する意味で啓示を仲立ちする者である。それは神の御意志を人間に明らかにして、人に命を与え、それを受けることが神の御意志であるとみなすのである」(G・フォーラー 7巻494頁)。

箴言の知恵が人格化されるのですが、ここで言われているのは、箴言が、われわれが理解する宣教者、説教者の務めを担っていると言えるのではないのでしょうか。

335 さらに次のような言葉もあります。知恵の伝承について。「あくまで人間を中心に考え……その人生を意義あるものとしてくれるのは何かを問うた」(和田幹男「新共同訳旧約史書注解Ⅱ」18頁)

340 さらにヨブ記について。「なぜ人はこの世で苦しみ、悩まなければならないのか。しかもなぜ、何の理由もなく悲惨なことが身に起こることがあるのか。このような人生に、はたして意味などあるのだろうか。この世界そのものが不条理にできていて、正義なる神などいないのではないだろうか……ヨブ記はまさにこの問題を正面から取り上げ、解答を求める」(同21頁)。人が善を行えば幸いになり、悪を行えば不幸になるというモラルの秩序を前提として、正しい生き方とはいかなることかを教えた賢者の言葉を集めた箴言に対して、ヨブ記は現実からの反論であり(同21頁)、

345 「どこまでも神との人格的な交わりの中で解決策を模索する。コヘレトには、ヨブのような神への信頼が欠けている。コヘレトの神はイスラエルの歴史を導いた神ではない」(勝村弘也、同222頁)。

350 さらに「説教学」の中でルドルフ・ボーレン先生が繰り返し「知恵」について言及しています。「説教するということは、言葉による聖なる遊戯である……話すことを学ぶ『幼な子』の遊びである！」(R・ボーレン「説教学Ⅰ」19頁)

「聖なる遊戯としての説教は、知恵をもって説教することとも言えよう」(20頁)。

その知恵とはと R・ボーレン先生は述べ、箴言8章30-31節を挙げられるのです。

355 「御もとにあって、わたしは巧みな者となり 日々、主を楽しませる者となって 絶えず主の御前で樂を奏し 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し 人の子らと共に楽しむ」。あるいは、喜びのかたちとして、「イスラエルの知恵は恐れと喜びが兄弟

関係にあると見ている」(420頁)と述べ、旧約聖書外典シラ書1章11-12節を取り上げておられました。

「主を畏れることは、誉れと誇り、幸せと喜びの冠である。

360 主を畏れることは、心を楽しませ、喜びと、幸福と、長寿をもたらす」。

「霊による感動こそ、説教の目的・目標である。福音は恍惚境ににまえひきずりこむような喜びの使信である。宣教というものは、聴衆の恍惚境に至ることを意図する。そこで隠されていたものが表面に表れ、神がすべてにおけるすべてになられることを示すしるしとなる。このような霊による恍惚境においてこそ、最初は神のみまえにあって楽しんでいた知恵が(箴言8章30節以下参照)、共に遊びたわむれている。この知恵は、完成の時に、はじめて正しくそのたわむれを始めるはずのものなのである」(同613頁)。

370 「わたしは説教を期待して待つ。説教を必要とするからである。あまりにもおとなになりすぎたために、そして愚かであるがために、あの遊び、神のお気に召す遊び、知恵と幼な子らの遊びの中に引き入れられる必要があるのである。わたしは、ふるさとへ帰る歌を歌いはじめ、失われた人々と共に喜ぶことを始める説教を待っている。わたしに生きることを教えてくれる説教を待っているのである」(同29頁以下)。

375

21頁1行目

ある人が、自分は情熱をこめて喜んで説教しているのだと言えば、せいぜいのところ、それはこの人のしあわせな気質を示すのだと見なされるか、悪くすると、自分のしていることに夢中になっている熱狂主義者だということにされてしまうであろう[Sagt nun einer, er predige leidenschaftlich gern, so mag man ihm im besten Falle vorhalten, das sei sein glückliches Temperament, und im schlechtesten, er sei ein Schwärmer, der sich an seinem eigenen Tun berausche.]——このいずれの非難もそれなりに正当である。しかし、わたしが自分を例にして説明しようと試みたことは、たとえこの[わたしという]実例そのものが疑問視されるにしても、正当な発言として承認していただきたいのである。詩篇第一〇七篇二二節によれば、救われた者たちは喜びのうたをもってみわざを語り伝

385

390 えるべきなのである。そして、説教は神について語るのだとすれば、それはやはり詩篇の詩人が「あなたのほかにさいわいはない」(一六・二)と言
い表した神について語るのである。詩篇第一一九篇は、いましめがどれほどに楽しみなものかを語って
疲れることがない。「あなたのいましめはとこしえにわが嗣業です。それはわたしの
心の喜びだからです」(一一一節)。

395 エレミヤは、試練の中でみ言葉の喜びを思い起こす。「わたしはみ言葉を与えられ
て、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなりました。万軍の神、主よ、わたし
があなたのみ名をになうことは、わたしの心の喜びとなったのです」(エレミヤ書一
400 五・一六)。明らかにエレミヤにとっては、み言葉をうけるということは、喜びを受ける
ことなのである！ 説教することにおける喜び、「情熱をこめて喜んで」ということは、
説教者の人格の中に求められうるようなものではない。喜びの言葉そのものである
み言葉それ自身の中に求めうるものなのである。それゆえにヨハネの伝えるキリスト
もご自分の語ることの目標として喜びを挙げられるのである。「わたしがこれらのこ
とを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの
喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ一五・一一)。説教者が聖書に耳を傾けな
がら、キリストご自身を聞きとるとすれば、その時、彼は満ちあふれる喜びにはいるの
である。喜びなき説教者は、おそらくまだ少しも聞いていなかったのである。喜びとは、
聞くことに成功することである [Der freudlose Prediger hat möglicherweise
405 noch gar nicht gehört. Freude ist ein Hör-Erfolg...]。このことは、われわれ
が喜びに仕えるものだという理由によるだけではない。むしろわれわれの仕事そ
のものが喜びの仕事であり、われわれが扱う言葉が喜びをもたらすものだからであ
る。み言葉への奉仕が喜びをもたらす。いかなる趣味の与える喜びも色あせる喜び
をもたらすのである [Der Dienst am Wort bringt Freude, Freude, vor der
410 alle Hobby-Freuden verblassen.]。

22頁4行目

説教における喜びに不可欠なのは冒険 [*Wagnis* 大胆な行為, 冒険, リスク] であ
る。説教は、あえて試みられる企てである。その向こう見ずのところが、説教に慣れて、
415 毒にも薬にもならないものにしてしまうということで覆われてしまうべきではないで
あろう [Eine Predigt ist ein gewagtes Unternehmen, dessen

420 Tollkühnheit nicht durch Gewöhnung und Verharmlosung verdeckt werden sollte.〕。われわれが説教するということを、聖なる遊びだと定義する時、今それに付け加えられなければならないことは、この遊びにわれわれは生命を賭けるのだということである。自分の説教を、役人が書類を片づけるように事務的にやってのける時でさえもそうなのである。常に生死が問われているのである〔Immer geht es um Leben und Tod.〕。

9行目

425 アンリ・マチスが、自分の描くどの絵にも、自分は生命を賭した冒険をしてきたと言ったことがある。芸術家が誇張したがることを考慮したとしても、ここにひとりの人が、絵をかうことのために、いっさいを身に引き受け、いっさいを賭してきているのを否定することはできないであろう。説教者は更になおどれだけのものを投入しなければならないことか。ここでは、線とか、平面とか、色彩どころではない、**焼きつくす炎で**
430 **ある神が問題となっている。この神の到来と現臨をわれわれは告げなければならない。**そうとすれば、火災が起こらないではすまないのである。われわれは火消しではなく、火つけ役であるべきである〔Nicht Feuerwehrleute, sondern Brandstifter...〕。花火職人ではなく、**炎を投ずるためにやって来た放火者**なのである〔Nicht Feuerwerker, sondern Feuerwerfer...〕。——われわれのつ
435 とめは危険である。なぜならば、ここで、この投げられた火に耐えられる誰があらうかと思うからである。——この冒険はもうひとつ別の局面を持っている。どのような説教においても、われわれは一種の急坂滑降〔Steilfahrt〕に取りかかるのである。その急坂〔Hang〕のかなり上方で、まだ完全に見通しがつかないところで、突然深淵〔Abgrund〕が口を開く。しかもこの急坂は、やわらかな土地ではなく、岩石の間
440 を走っているのである。**説教する者は、その目的地は知っているものの、その途中では未知なるものの中に突っ込んでいくのである。**

23頁2行目

445 説教者の冒険に更に不可欠なものは、この場合にはいつでも**冒険を行なう者の条件が、満たされていない**のだということである。**滑降競技をする者〔Rennfahrer〕**は傾斜を知りつくし、どのように重心を傾けるべきかを知っている。なお最後の不確

定要素を残すとしても、自分の事柄について確信を持ちうる。おそらく勝利は確信できぬまでも、立派に滑ることができると確信しうる。説教者は勝利を確信しているかもしれない。しかし自分に立っている力があるかどうかは自信がないのである。絵をかくこと、スキー、木を切ることににおいては、わたしは、自分が何をなしうるか、何をなし得ないかを知っている。自分が何を信賴することをゆるされているか、ゆるされていないかを知っている。説教する際にも、わたしは自分の限界をわきまえなければならない。ただし、それはほとんど役に立たない。なぜならば、はじめから限界を越えてしまっているからである。自分の限界の内部にあっては、わたしはただ神々について、神の思想について語りうるだけである。それらは、現実には、神を欠いているのである。説教する者は、いっきよにその限界を越える。自分に不可能なことをする。ゆるされない冒険をする。火を投げる。つまり、「神」—を語るのである。しかし、その場合には、自分に不可能なことをあえてするということが意味することは、その不可能ということの中で冒険を行なうことであり、その冒険をあえておかすことの中で、「可能」を知るということなのである。そうでなければ、説教論の教科書は無意味であり、説教学は異言についての講習をもって代えるべきことになる。しかしそれもまたおそらく不可能であろう。したがって説教論は、勇気を起こす書物、そこから喜びが生じてくるような正しい冒険への手びきでなければならないということになる。この冒険はしかし、盲目の冒険であるべきではない。あらかじめ、知識を得ておくことが必要なのである！

この冒険が成功すべきであり、挫折に至るべきでないならば、この知識を得ることが必要であろう。これまで、情熱をこめて喜んで説教するということについて語ってきた。この「情熱をこめて喜んで」という言い方は、ひとつの逆説を示している。「情熱をこめて leidenschaftlich」「情熱 Leidenschaft」ということは、苦しむこと Leiden に関わりがあるからである。今までわれわれは、一方の面だけを見てきた。ここでもうひとつの面を見ることが適当であろう。

24頁4行目

エアハルト・ケストナー Erhart Kästner はこう述べている。「……情熱とは、友情、敵意、幼さと同じく、ひとつの状態である。苦しみの状況の中にある、それはひとつの宿命である。熱情 Passion と同じく、それはわたしがあゆむ苦しみの道を意味す

る。つまり情熱の中にあるとは、苦しむことである。情熱の中に、わたしはちょうど捕われの身になるごとく踏み込んでいく。それは苦しむことができるということである。この言葉は受動的である。しかしわれわれは行動至上のところがあるので、これをきわめて能動的なものにしてしまった。だがそれは、間違いじみたもの [Verrückte] への転化でしかない↓のである」(『ひばりの学校』 Die Lerchenschule, 一九六四年、一八八ページ)。

情熱→苦しむ→受動⇒きわめて能動的なものに 間違いじみたものへの転化

10行目

明らかにわたしも、↑間違いじみたものへの転化に踏みこんだのであろうが、「休みの日の労働」について語った時、それによって自分を修正するつもりではあったのである。今や「遊び」とか「冒険」とかという用語は、「苦しむ [leiden]」、「情熱 [Passion (情熱. (キリストの) 受難!!)]」という用語によって補われなければならない。これらのことは、「情熱をこめて喜ぶ」ということに不可欠 [gehören] のことであり、常にこれに伴い [Begleiter 同伴者]、あるいはその前後を走る [Vorläufer (先駆者; 先駆け) oder Nachläufer (? 盲従する人, 信奉者?)] ののである。情熱をこめて喜んで説教する者は、情熱が単なる気質の事柄でない限り、苦しむことを覚悟するのである。情熱がほんものであるかないかは、この常に同伴してくれるものを耐え忍ぶことによって証明されるであろう。

この常に同伴してくれるもの！ つまり「苦しむ」、「情熱」/「受難！」を耐え忍ぶ！？

後ろから3行目

ここで支払わねばならない苦痛をあらかじめ見積るという試みは、このあらかじめ知識を得ておくという作業に不可欠のものである。それは厳密にまえもって計算することが可能だというのではない。そうでなければ、この冒険は計算可能となり、冒険ではなくなってしまうであろう。しかし状況によって驚かされ、その中で硬直してしまわないためには、あらかじめ見積りをする^{こともまた必要}なのである。ここでは生死をかけた遊びが問題になっているのだというわれわれの言い方も、苦しみについて語られぬ間は、空語でしかないことになろう [Schätzungen aber werden notwendig, damit uns der Zustand nicht überrascht und wir in ihm

erstarren. Auch wäre unsere Rede, es gehe hier um ein Spiel auf Leben und Tod, nichts als eine Phrase, wenn das Leiden verschwiegen würde.]。

510 *****

空語 Phrase Ⅰ. a《輕蔑的に》きまり文句, 月並みなく中身のない>言葉. b. 成句, 慣用句, 熟語

25頁3行目

515 説教論というものは、われわれが言葉のとりこ[Gefangenschaft des Wortes]になりつつ、どのような態度をとるべきであるか、「苦しむことができるということ」は何を意味するのか、ということへの手びきをすべきである。なぜなら、そのようにしてこそ、説教論の語るべき第一点について十分なことがなされるのである。説教論は喜びへと手びきする。それはただ苦しむことがしりぞけられ[unterschlagen (隠蔽され?)]ないようにとなされる。「神が正しく高き賛美を受けるのは、世俗のことに病んでいる精神によるほかはないのである」(カタリーナ・レギーナ・フォン・グライフェンベルク Catharina Regina von Greiffenberg)。

520 *****

(Wikipedia より) カタリーナ・レギーナ・フォン・グライフェンベルク(また Linsmayr von Greiffenberg)、Freilin[男爵の女性形] または結婚後は Freifrau von Seyssenegg (1633 年 9 月 7 日 Seisenegg 城、Viehdorf bei Amstetten、Niederösterreich 州で生まれる。1694 年 4 月 10 日ニュルンベルク死去) プロテスタント神秘主義に根ざしたキリスト信仰の詩人。バロック時代で最も重要なオーストリアの詩人の一人に数えられる。



530 ◎unterschlagen Ⅰ. 横領する. 2. 《話》(事実・情報などを)秘匿する, 隠蔽する, 握りつぶす, 公表しない.

Catharina Regina von Greiffenberg

9 行目

535 わたしは、自分がなした予備的考察の最初の諸命題を越えて更に前進するまえに、わたしがすでに始めてしまった告白について、なおひとつの意見を述べておきたい。

わたしがどれほど情熱的に絵をかき、スキーを走らせ、木を切ろうと、これらすべてのことを、**わたしは捨てることもできる**。切ってもよいほどに伸びた木がなければ、切る必要はない。雪が降らなければ散歩に行けばよい。絵をかくことは次の夏休みまで待ってもよい。正直に言ってこれらのことについて語るのは、いささかこれみよがしのことになりかねない。しかしいささか悲壮な言い方かもしれないが、**自分の趣味は捨て得ても、説教することをやめることはわたしにはできないことだと言いたい**。用心深く言えばただこう言いたいのである。わたしは今ではもはや説教者としての任命を受けて働いているわけではないが、説教することをこれまでやめたことはなかったのである。しかしながら、**最初の説教者たちのひとりが、「もし福音を宣べ伝えなければ、わたしはわざわざいである」とわれわれに語る時（第一コリント九・一六）、彼はそのことを説教者たるわれわれに、すべての説教者にあてはまることとして予言したのである**。そこで、わたしはここに予告されたことをもう一度自分の言葉で言い表わしてみながら、説教論を書かなければならないのである。**こういう誇張がゆるされるとすれば、わたしのこの次にする説教の準備のためにひとつの説教論を書くのである**。もう少し誇張をやわらげて言えば、わたしは説教することを学びたいし、学ばなければならない。それゆえひとつの説教論を書きたいのである。説教を強いられることから、説教論の必然性が生じるのである。

26頁4行目

「情熱をこめて喜んで」ということ、説教について喜び、また苦しむということに不可欠なものは、ここでは**常に生徒であり、初心者であり続けるという意識**である。学びつくしたなどというのは愚か者でしかない。そして常に初心に帰り続けることのない者は、ただ虚栄に生きる者でしかない。**み言葉は常に新しく聞かれ、新しく語られなければならない**。あらゆる説教の状況が、そのたびに新しくわたしをして、**生死を問う冒険にのぞましめる**のである。それ故に、説教するということは、**説教のたびに新しく始める**という恩恵を与えてくれるのである。このような**恩恵を把握する**ということ、**生徒であり続けること、これに思いをいたすこと、それが説教論を構想する**ということであり、**研究する**ということなのである！

さてしかしわたしはこの書物を、ただ単に説教者としてばかりでなく、**説教の聞き手**

としても書いている。ここでどうしても更に告白しないわけにはいかない。自分は情熱をこめて喜んで説教するということを語りうるとしても、わたしは——これでも十分遠慮深く言っているのであるが——ひと息に、わたしは情熱をこめて喜んで説教を聞くとはいにくいのである。ここでわたしの心を妨げる二重の悩みがあるからである。

第一に、われわれが聞くよりもむしろ語りたがるということは、人間の虚栄心と愚かさにと当然つきまとうことである。そうでなければヤコブの手紙の知恵の言葉は不必要なことになる。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」(ヤコブ一・一九)。この言葉を、神のみ言葉を聞き、また教えることとの関連で解釈しようとした注解者たちがあった。彼らはその語義の把握において誤っていたとしても、その誤りが示しているのは、彼らが、明らかに説教者の危険を深く見ぬいていたということだと言えよう。——だがこの知恵の言葉が、一般的な知恵を言い表わしているとしても、説教者というのは、誰にもあてはまる勧告を自分の説教については無用とするほどに超人ではないのである！人間は、早く聞くことと遅く語ることにしている警告を必要としている。説教者としてもそうなのである。

虚栄と愚かさ生きる者は、聞くよりもむしろ語ろうとする。このような事情は、神のごとくありたいという原罪を明らかに示しているということもあり得よう。神が言葉であられたがゆえに、わたしは自分が言葉でありたいと願う。ちょうど牧師も礼拝において最初の、また最後の発言権を持っているように、最初の、また最後の言葉を語りたと思う。神のごとくありたいと思う。人間であろうとし、聞こうとするよりも、言葉そのものであろうとするのである！ここにわれわれが受けることにとどまるよりも、むしろ自分から働きかけ続けているということの究極的理由があるのである。

われわれは更に、聞くことの、説教を聞くことの困難さを軽視してもいる。まるで説教を聞くことの方が説教することよりも容易で、危険も少ないかのごとくである！聞くということは冒険ではなく、焼きつくす炎である神と関われるのは語り手だけのようである。聞くことも直滑降であり、聞き手もまたその傾斜を知らず、隠された深淵に気づかないのである。ここでもわれわれは、転び、ひっくり返り、脊椎をいためること

がありうる。

聞くことが、説教することと同じように冒険であるならば、聞くというその冒険も、これこそ、「情熱をこめて喜んでする」ということにならなければならないし、われわれ
600 が説教を聞き得た時には、それはすばらしい、祝福を開示するものでなければならないのである。説教への道程は、快活さへの道、喜びへ至る道でなければならない。そして、説教が行なわれる道程も、喜びへ、快活さへ、開示された祝福への道程である。

605 しかし——これが沈黙しておくわけにはいかないもうひとつの悩みであるが——わたしが説教において聞きとるものは、概して喜ばしさをもたらさない。説教〔の中〕におけるほど〔、〕言葉が多くて、しかも自分には無関係に語りすごされてしまうことはまれである

〔Selten wird so wortreich an mir vorbeigeredet wie in Predigten.直
610 訳：説教の中でのように、わたしに対して言葉数多く、説教の中でのように言葉が通り過ぎていくことはまれである〕。

憂愁の気分〔Schwermut（1.憂鬱，沈鬱，憂愁．2.抑鬱）s-schwaden（直訳：（地面・抗などから立ちのぼる）蒸気，ガス，もや）〕や、キリスト教と結びつけられた、
615 あらゆる種類の時代分析、この世の知恵（ああそれが本当に知恵でさえあってくれたらと思う!）、わたしはまことにしばしば、説教壇から霧のようなものが立ちのぼるのを見る。それは、むしろ霧が晴れることこそ必要な時に、日光をさえぎり、会衆の上に広がるのである。そのような言葉の流れにあっては、わたしは眠ることもできないま
620 まであり、むしろ、退屈な話の時には目を開いたまま眠るという噂のある、かの才能豊かな教会指導者を羨しくさえ思うのである。（8）

もちろんわたしは、この説教学的に言えば霧に閉された国にも、光のあたっている場所のあることを知っている。太陽の島があるのである。ひとりの解釈者がテキストを
625 説き明かしてくれる。そしてそのテキストが、われわれにとっても今日いきいきとしたものになってくる。テキストそのものが語るのである。一度は、ひとりの村の牧師であ

630 った。もう一度は世界的に有名な組織神学者であった。彼は聖書の教えを展開した。
そしてわれわれは天国にひき入れられたのである。それゆえにルターも、たとえばス
テパノの見た幻を、説教の出来事と関連させることができたのである(ヴァイマール
635 版全集第四六巻、七一ページ)！ 教会が教えるという日常的な出来事において、
天が開かれる。「神はここにおられる！」そこに天国が開かれる！そこに、あの愛そ
のものである火が燃えるのである！ 気の利かぬ聴衆の一人が礼拝の終わった時に、
「うるわしい」説教を聞いたと語ったとしても、それを、説教者がうるわしく聞こえるよ
うに話して聞かせただけであること、その聞き手に正しい判断が欠けていることのし
640 るしであることを見なす必要はない。そのことが、ここに天国への門が開かれたことを指
し示すことがありうる。新しい歌がうたわれるべく、またそのことのゆえに神学固有の
美しさ *pulchritudo* が生まれてくるはずのものの、その輝きのいくぶんかでもさし
込んできたことを示すしるしであることがありうるのである。そういう場合、どうして、
「うるわしい説教 *schöne Predigt*」に、つまり、聴衆を賛美にひきこむような説教
645 にならないであろうか。教えの中で天国が開示される時、賛美以外の何があり得よ
うか。どうして喜んで聞くということがあってはならないのか！ マルコが、宮において
教えられるイエスについて「大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた」(マ
ルコ 一・三七)と語ったことの、いささかの痕跡でもくり返されることはあり得ない
のであろうか。その時、受難もまた遠くはなかったのである。説教者の苦しみ、「説教」
650 という彼の受難は最初は隠されたままのものである。説教の真実の美しさは、断食
をして、その顔に油をぬっている者〔マタイ六・一六―一八〕の顔に似ている。苦し
みの中から説教は輝きを得る。「内側からの大いなる輝き」〔リルケ〕を得るのである。
雄弁の放つ輝きに反論するものではない。ただ、説教がいつわりの輝きを見せてい
るのではないとすれば、その説教の美しさは、雄弁のそれとは異質のものなのであ
る。

能弁の説教者を聞く時、わたしはよく、まことに大きな悲哀に捕らえられた。——その
一方、わたしは、アルバート・シェーデリン Albert Schädelin の指導した説教学
655 演習における、ひとりの教師試験準備中の学生の説教を決して忘れないであろう。
その男はつかえつかえ語った。中途半端であった。形式的には全く不十分であった。

しかしそこには光があった。光があったのである。人々は、この男がテキストを完全には理解していないことがわかった。そして、彼の、**自分は説教をすることができないという思いが、テキストをして語らしめることになったのである。**このような説教者は確かに聞きやすいものではないが、**わたしはこのような説教者をこそ喜んで聞くであろう。**それにもかかわらず、**聞く者の願いを語るものとして、このわたしの説教論を彼の机上に贈りたいのであるが、この説教論は、聞く意志ある者に、聞くことを容易にしてあげることによって、このような説教者の助けともなることであろう。**

否定的な、そしてまさしく積極的な聞き手としての体験から、説教への期待をこめて、わたしはこの書物を書きたいのである。

わたしは説教を期待して待つ。説教を必要とするからである。あまりにもおとなになりすぎたために、そして愚かであるがために、あの遊び、神のお気に召す遊び、知恵と幼な子らの遊びの中に引き入れられる必要があるのである。わたしは、ふるさとへ帰る歌を歌いはじめ、失われた人々と共に喜ぶことを始める説教を待っている。わたしに生きることを教えてくれる説教を待っているのである。

マルティン・フィッシャー Martin Fischer はこういう記事を書いている。「講義であったか、礼拝のときであったか、ユリウス・シュニーヴィント Julius Schniewind が、嘆き、立腹し、呪うほどにしながらこう物語ったのは、もっとも印象深い経験のひとつであった。彼は、ハレにおいて、自分に、神無き者、失われた者の義認を説いてくれる説教者を探し歩いて、ついにそれを見出さなかった。自分にそのことを説きうる者は誰ひとりないのか、シュニーヴィントは、自分の心を脅かすものが何かを、牧師たちは全く理解しないような印象を受けた。牧師たちは、自分自身や、シュニーヴィントのような人の祝福について不安な思いになることなど全くないように思われたのである」(『諸考察』Überlegungen 一九六三年、二三ページ以下)。

われわれの説教がたくさんの霧や雲を作るばかりで、明るさや光を広げることのほとんどないのは、多くの説教者が、シュニーヴィントの不安を故意に見すごしている

690 ことに関連があるかも知れない。おそらく彼らは、われわれが、そうした不安を克服した時代に生きているように思っているからである。これに対して、やはり問わなければならないのは、教会や世界の中に憂鬱な思いが忍びこんでいるのは、われわれが
シュニーヴィントの不安を抑圧してしまっているところからくるのではないかということである。確かにわれわれは今日他の不安も知っている。しかし、それはいかなるものなのか！ それらはすべて、神から遠ざかっており、しかもその神からのへだたりを持ちこたえられなくなっている者の根本的不安に根ざしているのではないか。しばらく、このような推測に踏みとどまることにしよう。もう少し厳密に言えばこう言える。
705 わたしがこの書物を書くのは、罪のゆるしについて講義してみても、何らかの決断を求めて叫んでみても、それはわたしの助けにはならず、わたしを助けるのは、ただ判決そのものだからである。つまり判決がその名によって述べられる時、その方が、そこに現におられるような判決がわたしを助けるのである。わたしは、それ自体が奇跡であるような説教を期待する。説教が奇跡であるのは、そこで語られている方ご自身が、語られているそのことの中にはいってこられ、ご自身で発言され、ただ単に神とその解放の言葉について語られるのみならず、そのみ言葉がここに出来事となり、解放の言葉が実際に解放をもたらすようになるからである。

705 おそらく更にこういうこともゆるされよう。わたしは、そこで語り手自身が自分をそこに賭けることによって奇跡となるような説教を期待している。宗教上のお役人が、日曜日に講話をしてくれるようなことでは、眠らせないまでも、あくびをさそうであろう。わたしが期待するのは、そこである人が、ひとのいのちを救うために自分のいのちを賭けるような説教なのである。たいていの説教者は、あまりにも深く勇気を失っているので言葉に富んでいるのである。そして彼らが勇気を失っているのは、聞いたことがないままに語っているからである。それゆえにわたしは、説教者にとっても、聴衆にとっても、奇跡であるし、奇跡となるような説教を待ち続ける(第三章第Ⅱ節及び第一章参照)。その時、講壇に立つ人においても、その聴衆においても、ネリー・ザックスが、イスラエルについて歌ったことが成就する。「イスラエルよ、あこがれの頂点に立つ者よ、あなたの頭上には、奇跡が雷雨の如く注ぐ。あなたの時代の苦悩の
715 山なみの中に降りそそぐ雨である」。——まさしくそのようなことが起こるために、わたしもまたこの書物を書こうとしているのではないか。

720 そのとおりである。まさしくそのことを、これまで語ってきたのである。そして**そうなるべきなのである**。説教者はすでに先立って語られたことに仕えるべきである。奇跡に赴くべきである。雷雨のごとく奇跡は降り注ぐべきである。そして**わたしの書物は、学生たちへの呼びかけ以上のもの**であろうとはしていない。斜面の上にあって、走り出そうとして不安になっている学生、道なかばにあって、何らかの意味で疲れ果て、道を失ってしまっているような人に対する呼びかけである。奇跡に向かう途上での呼びかけである。これは必要なのである。なぜならば、**奇跡は、自明なるものの反対**だからである。**奇跡は世界を変革する**。創造の世界を変える。個人を変革し、社会を変革する。奇跡において変革が起こる。奇跡は、現在あるものの革命をもたらす。奇跡は、ものをひっくりかえしてしまう。奇跡においては何かが起こる。しかし、この**奇跡を奇跡たらしめる出来事は神のなさること**であり、計算不能であり、驚異の思いを呼びさ
725 ます。これを**計画することはできない**のである。

730 説教の計画をつくることはできる。しかし、**約束された奇跡までも計画することはできない**。それゆえに、情熱、喜び、冒険、遊び、苦しみについてわれわれが述べてきたすべてのことは奇跡に属するであろうし、これを呼び起こすことはできないのである。それゆえにわれわれは**数多く説教しながら、ほとんど奇跡を知らない**のである。説教
735 ならざる説教の数を重ね、その上に何らの奇跡も重ねられることのないままに、多くの**人々が、説教をしている**のである。

740 そうすると、**ひとつの説教論が奇跡行為の手びき**にならなければならないのか。それがわれわれの考察の論理的帰結のように思われる。説教は奇跡である時に説教なのである。説教論は、説教が、奇跡そのものにほかならぬ説教になるようにと手びきをするのである。それゆえに奇跡行為への手びきなのである！——こうした論議において、いつも考慮されないままになっていることは、われわれは**説教しながら、自分には不可能なことをやっているのだ**ということである。**せいぜいのところ説教論は奇跡への勇気を作り出し、奇跡を期待する手びきを与える**だけである。「どうか、あなたが天を裂いて下られるように」(イザヤ書六四・一)。このことがすでに示唆していることは、説教論は、み言葉に仕える者を雄弁の王者にする魔法の書物ではない
745

780 パウル・アルトハウス Paul Althaus は、「**教会の説教についての疲れというものが、それ自身として存在すること**」を否定する。「教会はむしろ新しい舌により、新しい霊の力による説教を待っているのである。われわれの説教には倦み疲れたかもしれない。しかし、説教そのものにではないのである」(『福音主義的礼拝の本質』
Das Wesen des evangelischen Gottesdienstes, 一九二六年、一八ページ)。
オットー・ヘンドラー Otto Haendler は、この発言は今日もなおあたっていると
785 言っている。(『説教』Die Predigt, 一九六〇年〈第三版〉六ページ)。マンフレート・
メッツガー Manfred Mezger は「**説教の聴衆が、説教に〈何ものか〉を期待して**
いること、まことに多くのこと、本来的にはすべてを期待しているということ」に驚いて
いる(「説教の権能としての歴史的真理」『福音主義的神学』第二二号、Die
Gechichiche Wahrheit als Vollmacht der Predigt, EvTh 22, 一九六二
年、四七八ページ)。——この関連で、相互には少しも似ていない**三つの現象**に言
790 及しておきたい。最近の学生紛争において、礼拝もまた明瞭な**抗議を呼び起こす**き
っかけとなったが、この行動もまた**ひとつの期待の表現**を示すと言えないであろうか。
——**礼拝に出席する者の数が減少していることから説教の終末を予言する預言者**
たちに対しては、**ビリー・グラハム**〔現在、日本では一般的にビリー・グラハム Billy
Graham〕の**数的な意味での成功**を挙げることができよう。これも**潜在的な聴衆の**
期待がなければ、不可能なことであろう。——カトリック神学の聖書的説教への転
795 向は、聴衆の期待という表現で総括することはできないかもしれない。しかし、**カトリ**
ック神学の説教へ向かう驚くべき如とした展開は、聴衆なしには不可能であろう! カ
トリックのキリスト者たちが説教に期待していることを表わすものとしては次のものを
参照のこと。『聴衆と説教、ひとつの会議報告』オットー・ヴェーナー、ミヒャエル・
フリッケル共編、一九六〇年。Hörer und Predigt. Ein Tagungsbericht, Hg.
800 Otto Wehner u. Michael Frickel, 1960. エリザベート・プリュンネケ「対決を
迫られる説教」ギュンター・ビーマー『説教のわからぬ言葉』一九七〇年、六三ペー
ジ。Elisabeth Plinnecke, Predigen in Konfrontation, in : Günter
Biemer, Die Fremdsprache der Predigt, 1970, 63.

805 **われわれをひとつの期待が迎えてくれるということ、説教者としてのわれわれは、決**
して勝手気ままなことをやって趣味を楽しんでいる者ではないということに、驚きの

心を抱くということから、説教作業を始めるならば、それだけですでに多くのことを得たことになる。日曜日の労働者、と言われる。そのとおりである。だがその奉仕を待っていてもらえる日曜日の労働者である。自分の奉仕のつとめを、これが欲せられ、望まれているつとめなのだということについての驚嘆から始めるならば、このつとめはまた、感謝を伴う驚嘆の思いのうちに果たされるであろう!

さてしかし、多くのプロテスタント教徒は、説教を聞くことを怠けるストライキをすることによって、自分たちが講壇上の男からも女からも、何も期待していないことを、全く何も期待していないことを示威している。この現象がこの点で見せかけのことなのかどうか、わたしには確信がない。だが究極のところで確かなことがある。被造物が切なる思いで神の子たちの栄光が明らかになることを待ち望んでいるということが真実であるとすれば(ローマ八・一九)、幻滅を味わっている者も満ち足りている者も、成熟している者も未熟な者も、説教者と聴衆それ自身が奇跡となることを待っているのである。それと知ることのないままに、彼らは説教が説教となることを期待しているのである。この意味では、この世のあらゆる耳は、沈黙が打ち破られて喜びになることを待っているのである。教会には入ってこない者でも、ひそかにその耳を教会の壁につけて、語ることも聞くことも奇跡であることを証示する言葉があるのかどうかうかがうのである。教会の期待ともろもろの民の期待との間にある相違は、教会は自分が待っているのは誰であり、何であるのか、よく承知しており、承知しているべきだということと、他の被造物はそれを知らない、まだ知らないか、もはや知らなくなっているということとでしかないのである。死者でさえも、自分たちをいのちへと呼び入れる言葉を待っているのではなからうか。

しかも、説教者がその方について語っているその方ご自身が、まず第一に、説教することと聞くことを待っておられるのである。神が待っていてくださるということの中に向かって、われわれは説教の準備をする。神の期待の中へと、われわれは語りこむ。説教をする。説教を聞くのである。われわれの説教は、神ご自身によって期待されていた語りかけなのである。

この点に、説教せざるを得ない究極の理由がある。説教が受け身のもの **Leiden-schaft** [情熱の意味を持つこの語に両意を持たせている] であるということ、ここに神の派遣の行為が行なわれているということ、救い主の呼びかけがなされているのだということが、ここに含まれている。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として……」(マタイ二八・一九)。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい……」(マタイ一・二八)。いずれの場合も、派遣においても、呼びかけにおいても、待っておられる方が語っておられる。それゆえに、われわれの説教は、**二重の観点において受け身の苦しみ Leiden-schaft** である。——
840 結局のところやはりここで受ける苦しみは、説教者にとって自分が語りこむべき期待の地平線が、くり返し暗く見えなくなってしまう、自分がどこでもどんなに期待されているか、ということがわからなくなり、何よりも、ごく身近に自分を待っていてくださる方を見失ってしまうことなのである。われわれは、見えるところによらず信仰によって生きているのであるから、この見えないという苦しみなしに、説教において「情熱をこめて喜んでいる」ということはないのである。しかし、われわれが説教しているそのお方は、今来りつつある方であり、そのような方としてわれわれの説教を待っていてくださるがゆえに、喜びへの出口を開かぬ苦しみは、ここには存在しないのである。
850

説教者の困惑と、聴衆の不愉快さの共通分母であるのは言葉の喪失の状況である
855 と言えよう。説教者の状況の特質は、説教者が、神についても、世界についても、教会についても、自分自身についても困惑してしまっているということにある。